特集

序 ～てんかんを特集するにあたって～

若林俊彦*

てんかんの治療は，てんかん発作の的確な診断とその制御が主たる内容であるが，患者さんと長期に向き合う事例が多く，そのため，患者さんの生活の質（quality of life）の向上に配慮した包括的な長期治療戦略を検討することが要求される。

てんかんの分類については，新しいてんかん症候群分類が，2017 年に ILAE（International League Against Epilepsy）から提唱され，体系的また段階的に分類を進めるものとなった。さらに，これを基に 4 つの軸で分類を試みる体系を統合した「Integrated Epilepsy Classification」も提案された。しかしいまだに，てんかんの的確な診断は困難を極めており，さらなる病態解明と実臨床に即したてんかん分類の展開が期待されている。診断は，臨床症状に加えて，脳波と MRI 画像情報に基づいて分類されており，1989 年のてんかん分類からはかなり多層性に対応できるようになった。特筆すべきは，「起始不明」項目を導入したことで，無理に分類をする困難を避けることができるようになった反面，今回の分類が完成型ではなく，新たな知見を加味しての再評価による分類の進展が必要であることを前提としている。また，治療に至っては，使用できる薬物の拡大による治療選択肢の多様化が進んだことや，外科治療としては手術の多様性などが近年話題となってきており，その長期成績報告が待たれる。このような発展途上の状況下で，より良い発作予後に対しての現状の取り組みを，最先端診療に携わる精鋭に語ってもらうこととした。

まずは，現在のてんかん診療全般を包括していただくために，愛知医科大学精神神経科教授で，現在，愛知県てんかん連絡協議会議長を務めておられる兼本浩祐先生に，「てんかん診療の現状と今後の展望」の執筆をお願いした。次に，内科的治療を中心として，成人については，名古屋大学医学部神経内科教授で，名古屋大学病院てんかんセンター長を務めておられる勝野雅央先生に，「成人のてんかん診療の現状と課題」を，そして，小児及び AYA（Adolescence and young adult）世代については，名古屋大学障害児（者）医療学寄付講座教授の夏目 淳先生に，「小児及び AYA 世代のてんかん診療の現状と展望」を纏めてもらうこととした。次に，外科的治療について，名古屋大学脳とこころの研究センター及び脳神経外科准教授の前澤 聡先生に，「てんかん外科の現状と展望」を概説していただいた。そして，最後に，名古屋大学病院精神科・精神保健福祉士の後藤紋香先生に，「てんかんの患者が利用できる社会福祉制度について」を紹介してもらい，包括的な患者支援の体制について纏めてもらうこととした。どれも，読み応えのある力作である。読者の皆様の今後のてんかん診療の一助になれば幸甚である。

Key words
てんかん，ILAE（International League Against Epilepsy），Integrated Epilepsy Classification

* Toshihiko Wakabayashi：
医療法人五一六五 ナゴヤガーデンクリニック

利益相反

本論文に関して，筆者が開示すべき利益相反はない。